方向　第四二号　一九八五年七月一日発行　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

子どもと植物

―寺の秋　(7)―

原田　慶

ねこ柳の花芽がまだ銀ねずみ色の頃に、掌にはさんでころころもむと、先の方にすっととがった尾の形ができて、ねずみのようになる。チンコロバンという呼び名は、この遊びにぴったりだと思われる。

トケッキョウ、というのは、かんぞうの葉の、ねもとのあまり開いていない部分をちぎり、くわえて吹くと、そんな感じの音が出る。ほたる袋は、花を破らないように、しべを取り除き、やわらかくもんで、花が透きとおるくらいになったら、ふうせんのようにふくらませて口をしめ、ポン、と音させてつぶすので、アッポカッポと呼ばれる。

カラスノエンドウは、さやから実を抜き去り、はしを少し切って、口に含んで吹くと、呼び名のとおり、シーピー、と鳴る。スズメノテッポウも、ピーピー草と呼ばれて、穂を抜いて、穂のねもとの白い薄い膜を、ふるわせるように、そっと吹くと、ピーと鳴る。

たんぽぽの茎は丸い筒なので当然鳴るが、つばきやかしの葉も、丸くまいて筒にすれば、鳴らすことができる。

大豆の葉は、手をかるくにぎって筒を作り、親指と人さし指の方を口にして、その上に葉をおき、もう一方の

手でたたく。上手に空気の圧力を使えば、パン、と鳴る。

山吹の茎のしんをうまく抜き出して、口に入れ、唇から強く吸いこむと、つばにぬれて、すべりこむときに、スポン、と音をたてる。

ほうずきはいうまでもなく、こばん草や、ペンペン草は、ていねいに細工して、耳の傍で振って、音を楽しむ。ほたる袋を破らないように、透明になるまでもんだり、そら豆の葉を、裏表はがして袋にするのには、こまかい神経と、時間が、かかるものである。ポンと鳴らすのは一瞬である。そのおどろきを楽しむために、ていねいに作業して、自分も他の人もいっしょにおどろき、うまくいったと感心して笑う。材料の選び方、作り方で、さまざまに音色がちがい、音の高低、強弱、清濁などが違ってくるから、単純な遊びの中にも、ちょっとした妙味が楽しめるわけである。

いま、寺の庭に、どんどんほたる袋がふえて、初夏には、白にあずき色の斑のはいった、つり鐘のような花が、さわがしいほどに咲く。

しかし、もう、アッポカッポの遊びを楽しむほどのやさしさは、誰も持ち合わせていない。

ざくろ　―寺の秋　（8）

十一月三日、落ち葉や本堂のお花の枯れたのなどを燃やす。まだすっかり乾いてしまってはいない、しわだらけになって縮んでいても緑を保っているような桐の落ち葉、椋の落ち葉は、甘い香を含んだ煙をあげて燃える。

風がないので、残り少くなった椋の枝の葉も、今日は舞いおりてこようとしない。

八ツ手が白い宇宙のような花を少しずつおしひろげ、くちなしの実が、ようやく赤味をおびて、緑の葉のあいだから顔を出す。くちなしは、毎年おおすかしばの幼虫に食い荒らされて、実はほんの数えるほどしか残らないが、今年はせっせと幼虫をとり、春から初夏には薬もかけたので、いくらか実が多いようである。

墓地の「法華一乗の宝塔」の前にある、ざくろの木に、たった一つ実が、できた。わざと他の花をつみとって、ちょうど塔の前に一つだけできるように剪定してあったらしい。赤く熟れて皮がはじけ、中にピンクに透きとおる実がびっしり並んでいる。まったく誰が見ても、エメラルドのようだと言うのが、一ばんぴったりするだろう。種を包む薄い皮膜が、甘い果汁をいっぱいに含んで、一粒一粒、ちょうど、とうもろこしの粒を小さくしたような、でこぼこの球体で、並んでいるのである。三粒四粒、口に入れて歯でそっとつぶすと、甘ずっぱい味が口にひろがり、まっ白い種子が残る。今のように菓子類が豊富でなかった明治の頃の駄菓子屋には、ざくろやナツメが、子どものおやつとして並んだことを、この寺の母から聞いた。

母は、実に、明治の女丈夫であったと思う。厳しさと、たくましさと、行動力と、何よりも自己を信じて疑わ

ざる信念こそが、他の人間をもたちあがらせる原動力であるのかもしれない。

「法華一乗の宝塔」というのは、この寺の檀信徒みなが、一つの舟に乗ってお浄土へ渡るための、安らぎの塔であり、祖先をまつる墓である。

以前は、それぞれに墓石を建て、各自の墓へお参りするようになっていた。だから墓地には、墓石がずらりと並び、大小・高低さまざまで、よくまつられている墓、めったにお参りのない墓など、どこにでも見られる墓であった。しかし、人が死んでからまでも、さまざまに違った扱いをされるのは、あやまりである。さまざまに運命を生きた人々が、一生を終ったときは、みな同じようにお浄土へ渡れると、信じていたい。

そのような考えから、この塔を心に描きはじめた人が、構想を説明し、仏の教えを説き、人々の理解と協力を得るために、何年もの年月が費された。理解し納得する人も少しずつ出てきた。しかし寺を去った人もあった。それはまだ態度のはっきりしているだけ、耳を傾けた人といえるのだろう。無関心で、反対でも賛成でもなく、本気で聞こうとしない人が、ほんとうは何事につけてもいちばん多いのである。

この塔は、各檀家の墓石を集めて、方形の塔に積みあげたものである。お骨はみな掘りあげて、塔ができるまで本堂に安置し、のち供養して、塔の内部に皆いっしょに納められた。これから後、この寺に葬られる人々は、みなともに、この舟に乗ることができるのである。なんという安らぎであろうか。

しかし、長い習慣から、新しい事がらになれるには、また長い年月を要する。この塔が皆の乗る舟であり、それぞれの大切な人をまつる塔であることを、今までの〇〇家の墓と同じように感じとることができるには、これ

から後に生まれてくる子どもの時代まで、待たなければならないのだろうか。現在、この塔を自分達のものとしてとらえ、大切に供養している人もある。まだ、自分の家の墓石にこだわりつづけている人もある。

こだわりをつきつめて、解きほぐすことによって、すべてから解放され、自由になれるというけれど、それが私たちには、ほんとうにむつかしいことなのである。

墓地の中心に光っていた、まっ赤なざくろを頂いてきて、本堂に供え、のち、みなで少しずつ食べた。種子を包みこんでいる、ほんの少しの果汁は、かすみを食べるようにほのかで、ほとんどが白い核であるから、捨てる部分の方が多いのだけれど、形のおもしろさと実の美しさ、食べるというにはほどとおい、子どものままごとのような遊びの心も加わって、いつまでも、人々のなつかしさを、さそっているのかもしれない。

（一九八四年　カット・原田道子）

※前号正誤　1頁2行　寺の秋（4）→寺の秋（5）　3頁1行　寺の秋（5）→寺の秋（6）　17頁5行　宋訳は→唐訳は　なお、カッコの使い方など表記法が不統一で、はずかしいが、その統一と訂正は別の機会に。

岡田充博『王昌齢「箜篌引」考』（上）（下）　1982 5 21　原田憲雄

尊論恵投、まことにありがとうございます。精緻確実なご行論に感嘆いたしました。拙訳は、貴論のような周到な準備の上に成ったものではなく、ご批判は、たぶん、すべて当っていると思います。わたし㊙「王昌齢小伝」も手をつけては放ったらかしたままでおはずかしいことですが、稿を続けるようになりましたら、ご示教を生

かしたく存じます。尊論は非常に慎重で、これから申すことも充分お知り尽しの上、確実なことだけを述べておられることは、よくわかるのですが、せっかく頂いたことですので。蛇足ながらの雑談としてごらんください。

竜標左遷……が……全くいわれのない冤罪ではなく、責任はむしろ王昌齢の側にあった。

これは、新唐書本伝等の現存資料によるかぎり、おっしゃる通りですが、昌齢登第時の座主〈試験官〉が李林甫・楊国忠などとは反対の側の人であったこと、同時及第者がみな不遇であったこと、などを考え合せると「冤罪でなく」とは言い切れないのではないか。もっともかれの友の常建のように隠居を決意すればよかったのでしょうし、「脱略」をむしろ自負したようなかれには、上級者に口実を与えるようなマイナスの「細行」のあったろうことは充分想像できますが、志を政治に断たないかぎり、左遷はやむをえなかったのだろう、とも感ぜられるのですが、いかがでしょうか。王維の友の韋陟なども、中書舎人から左遷され、昭州平楽尉にまで下降し、速ざけられています（小生の中国詩人選6『王維』八一頁）。「政治」に望みをかけたことのないわたしなどには想像もつかず、むだなことのようにも思われますが、そこに命をかける中国の知識人を遠望していますと、王昌齢に同情したくなります。杜甫と王昌齢との対比は、おっしゃる通りでしょう。王氏は杜氏にくらべると何といっても秀才で、それだけに自分のまとめた詩論（これもどれだけが全貌かわかりませんが）にひきずられて、自らの可能性の限界を、詩論を、爆破できなかったところがあるようです。そういうもどかしさを愛惜するところが尊論ににじんでいて、同感にたえませんでした。敬具

塩山真也　「白視の客―将発―」　1982 8 28

拝復　二十七日におはがきを、本日、貴稿掲載の『青銅時代』を落掌、早速拝見しました。中野重治が「運転中は話しかけないで下さい」という市電の掲示板の言葉を、たぶん『斎藤茂吉ノート』に、引用していたのを、当時、たいへん感服した記憶があります。だのに、雑誌『方向』を出しはじめたころ、いろいろな方に送って批評を求めました。励ましや批評を与えられたのは学者で、わたしたちの最もほしかった詩人・小説家・批評家からは梨のつぶてでした。『方向』はだんだん研究誌のようになり、わたしも人からは「研究者」とよばれるようになりました。今のわたしは、詩人とも小説家とも批評家とも呼ばれたい気はなく「研究者」でもあるまいと思っている一素人にすぎませんが、あの当時、梨のつぶてだった方々の親切は、よくわかるようになりました。敬励された諸先生への感謝は決して消えませんけれども。小説として出発なさった貴稿、他からの批評などには心をとられず、とにかく持続して完結されることを念願します。もとより資料として先進の研究を活用なさることはご自由ですが。右のような理由で、貴稿に対する愚感を述べることもさしひかえます。始めることはやさしいが、持続することはむつかしく、完結することはいよいよ困難です。始めることも自由、中断することも自由。未完であることも自由、完結することも自由。文学はそういう自由の上に成立する作業で、わたしは始めながら、そのほとんどを未完のまま、文学の自由を楽しんでいます。ご文安を。敬具

本田　烈　「尾崎放哉（承前）ー須磨寺時代までー」　1985 4 29

お元気のようで何よりです。ご恵投の貴稿、拝見。

聞こえぬ耳をくつつけて年とつてる

という句が痛切です。肉の耳だけでなく心の耳も、聞こえぬようになりながら、年をとっている己を自覚するにつけ。放哉は、肉の耳だけだったのでしょうか。二二八頁の小浜「常高寺」がもし日蓮宗なら、五十年ほど前の夏、棚経の手伝いに五日ほど行ったことがありました。うらに小川の流れているわびしい（寺は大きいが）ところだったような記憶があります。お礼まで。

永遇楽　―李清照（一二四）―

原田憲雄

落日は金溶かし／夕雲つらなり／ひとはどこにおいでやら／柳染め靄の濃さ／「梅花落」ふく笛のこえ／春の趣きはどんなかしら／元宵の節句の／なごやかな天気も／やがて雨風になろうやも／きれいな馬車で／誘いにきた／酒や詩のお仲間もことわった／／都が盛んだったころ／女ものんびり／三五の日は賑かでした／翡翠の羽かんざし／金糸の雪柳／ぎっしり挿して贅くらべ／今はやつれ／髪に霜おき／夜歩きは気がひける／カーテンの内らで／聞いてるほうがまし／人々の笑うさざめきを

永遇楽は「えいぐうがく」とよむ人があるが『詞律』によるなら「えいぐうらく」。双調、百四字、前・後段十二句（『詞譜』などの数え方なら十一句）、四仄韻。のちに平韻のものも生れるがここには関わらぬ。

落日鎔金，　Luòrì róng jīn,

暮雲合璧，　mùyún hé bì,

落日は黄金を火で溶かしたよう、夕暮の雲は玉をならべたように連なり、というほどの意で、例えば薄田泣菫が「夕暮海辺に立ちて」で「直黄（ひたき）、丹摺（にずり）、紫の／雲藍色に収まり、／日の影徐かに薄れ行けば、／黄金浮けし波の穂の／：：」とうたうのとほとんど同じ光景だが、たった八つの漢字の組み合わせが作り出すこの表現空間の、なんと輝かしく豪華で、熱烈と憂愁とが融溶し、無限の感じを読者に与えることであろう。「鎔金」は唐の劉禹錫や宋の蘇軾が湖に映じる月光を「鎔銀」と形容したのを点化したのであろうか。清照とほぼ同時の廖世美の「好事近」に「落日水鎔金」の句がある。数首のすぐれた作をのこすのみで経歴も不詳。だからどちらが先んじたのか、まねたのか暗合か、すべて分らぬが、廖のが劉・蘇の句に由来しようこと、ほぼ間違いない。「好事近」には「驚起一双飛去」という清照の「如夢令」の秀句を想わす句がある。「好事近」もいい詞だが、「永遇楽」の最初の二句は歴絶する。「落日鎔金」はもはや「水」にも拘束されず、天地に金を溶かす落日となっている。夕雲のたなびくのを見れば人はもの思う。『文選』に載せる江文通の「休上人」に「日暮碧雲合、佳人殊未来」とうたうのはそれで、以来「雲合」は愛する人の来ぬ嘆きのきまり文句となった。

人在何處。　　rén zài hécù.

あのひとは何処にいるのだろう、の句は江氏のを十二分に畳みこんでいるのだが、初二句からここへの移りには、それを全く忘れさせるほどにきまり文句の垢をけずり、このさりげない、ほとんど無色のつぶやきが、絢爛豪華な前二句を吸収する。「人」を「亡夫明誠」とする解がある。この詞が清照南下の後の作であることは疑えないが、一一二八年春、江寧で夫に再会するまでにほとんど一年離れている。その年の元宵すなわち一月十五日

にはまだ会っていないらしく、作時をそこらに当てる方が詞の情緒にもふさわしい。

染柳烟濃。　　Rǎn liǔ yān nóng,

吹梅笛怨，　　chūi méi dí yuàn,

春意知幾許。　　chūnyì zhī jǐxǔ.

清照の愛読した王維に「桃は紅にまたゆうべの雨をふくんで濡れ／柳は緑にさらに春がすみを帯びてしっとり」（田園楽）の句があり、これは朝だが、彼女の見る柳は夕もやにじっとりにじんでいる。六世紀の江総は「長安の少年軽薄多く、両両共に唱ふ梅花落」とうたう。たぶんこの詩に節づけた笛の曲が「梅花落」で、唐代には小梅花、大梅花と二通りに奏でられた。女心をそそのかしやまぬものだったに違いない。「落ちる梅、実は七つ、わたしを欲しい方には、いいチャンス」詩経のそんな詩にもくわしい彼女には、いっそうのニュアンスをこめた思いがあろう。それが「春意」の句。よそごとをいってるふうにもとれるけれども。

「夏よ久しかりけり、われ夏の恵み受けじといどみしが、今宵は遂に打ち負けて、身中つかるるまでの快さ。……あ、われ此宵、わが肩によりかゝる、若き男の胸こそ欲しけれ。ロマンチックなる事柳のかげにも優りたる吾心の倦き疲れを、かの人は吸ふべきに」永井荷風の訳したノワイユ夫人の詩にくらべると、奔放のお化けのようにけなされる李清照のなんとつつましやかなことだろう。

元宵佳節，　　Yuánxiāo jiājié,

融和天氣，　　rónghé tiānqì,

次第豈無風雨。 cìdì qǐ wú fēngyǔ.

旧暦正月の十五日、すなわち上元、の夜を「元宵」という。北宋の首都ではこの日をはさんで三日、街中に灯籠をともして祝い、人々は着飾って出歩き、にぎわった。『東京夢華録』にはそのさまを活写する。その夜のランデヴウをうたう欧陽氏の作は拙稿「詞論」4にのせておいた。

都以外の地でもそれぞれに節句の催しはあり、にぎわうことは同じでも、都の繁華を知りそこで青春をすごし、愛する人とともにさまざまな楽しみ方をしてきた中年の婦人には、その日の天気、空もようにも、ぎっしり記憶がつまっている。うっとりするほどの一日が、夕方からかたむき、夜に入ると雨風となり満都の灯籠を引き裂きうちのめしたこともあったろう。節句のように楽しいと感じた夫婦の間も同じこと…。今日の燃える夕空をながめながら、彼女はそんなことをいつか考えている。

來相召、 lái xiāngzhào

香車寶馬， xiāngchē bǎomǎ,

謝他酒朋詩侶。 xiè tā jiǔpéng shīlǚ.

「さあ、いらっしゃい。これからたれそれさんのおやしきでパーティーよ、あなたのことをお話したら、ぜひ誘ってきてほしいと、夫人もおっしゃって。ほら、招待状もあずかってるの」美々しく飾った馬車で迎えに来る。飛びたつ気もするが、導いてくれる夫のいない今の身で、とおもうと、つい「せっかくですが」と断ってしまう。

王維に「比部楊員外とともに十五夜に遊び静者〈隠者〉の季をおもうことあり」という詩がある。少し長いが

引いておこう（原文とくわしい注は拙著『中国詩人選6・王維』）。

承明〈侍従〉は休みが少なく、建礼門内で文書調べに忙しい。夜中は人の往き来も絶え、帰宅といえば日の落ちたあと。どうして知ろう、十五夜に、千万軒が門ひらき、夜出て朝がた帰るまで、まち中が南新地へぞめくのを。界わいを馳せめぐるのはみな時めいて、王孫、公子、五侯家のひと。もとより月は明るくて、まひるのようだ。軒につらねた灯籠は花よりきれいと皆がいう。千頭あまり馬をつらねて、たれかと思えば天子側近のなにがし殿。豪勢な七香車、よく見ればそれがし殿の想い者。香車も宝馬もいずれ劣らぬさわがしさ。この雑踏をまたのし歩く男伊達。争って行くさきはあの長楊宮、さては柳市の北町だ。だが、わたしらが訪ねるのは、精舎のほとり竹林の前。ひとりひっそり心ゆかしい仙郎どの。いっそ、黙って座禅するのがたのしみだ。なにも思わずたがいに往き来してもいいなら、お宅にしばらくお邪魔して、あかざの粥をおいしく頂戴できようか。

清照は王氏の詩を意識していたに違いない。しかし、隠者を訪ねようという風な傾きは、このときの彼女の心にはなかったろう。むしろ、断ったパーティーの、にぎやかな光景が、眼前にしきりにちらついた。それが後段で、かつての都での節句の風景とダブッてうたわれる。

中州盛日，　Zhōngzhōu shèngrì，
閨門多暇，　guīmeń duōxiá，
記得偏重三五。　jìde piānzhòng sānwǔ.

「中州」は首都のある地方、都そのものを指すとみてよい。それが繁栄していたころ。「閨門」はひろく家庭

をさすが、ここでは婦人に重点がかかっている。いろいろある節句でも、上元が特に尊重され、にぎわった。記得はおぼえている、印象にきざまれている、というほどの意。

鋪翠冠兒，　Pūcuì guānr,

撚金雪柳，　niǎnjīn xuěliǔ,

簇帶爭濟楚。　cùdài zhēng jìcǔ.

女にとっては、やはり衣装。かわせみの羽を思いっきり高々とさした婦人帽、キラビヤカに金糸でよった雪柳の髪飾り、……。あら、デラックスね、まあ、シックじゃないの、たがいに相手をほめあいながら、自分の工夫をほこりあう。それは本を買うためには着物を質に置いたという、変った女の李清照にとっても、身もとろける愉楽であったに違いない。「生家も嫁いだ家も貧しくて」などと彼女はいうが、それはぜいたくな徽宗皇帝朝の貴族の間での比較で、紫式部が貧家の子というようなもの。上元の夜には、庶民の娘がため息をつくほどに、しかし清楚に、着飾ったことだろう。だが、今は。

如今憔悴，　Rújīn qiáocuì,

風鬟霜鬢，　fēnghuán shuāngbìn,

怕見夜間出去。　pàjiàn yèjiān chūqù.

夫と離れ、十五台の車に積んだ書物などを護りながら、淮河をこえ、揚子江を渡り、髪は風にさらされ鬢に霜おく身。唐代の小説「柳毅伝」に柳毅なる書生が湘水のほとりで「風鬟霧鬢」の女にあい、女が竜神の娘で、嫁

いだものの、夫は女中におぼれ、夫の父母に訴えたが、うるさがられ婚家を放り出された、と聞き、女の手紙をもって竜神を訪ねる話がある。その語を一字かえてここに使った。さきに触れたように、「永遇楽」が一一二八年の作とすれば、清照は四十五歳。これもさきに「中年」といったが、十二世紀の中国では（日本でも、おそらく世界のどこでも）四十すぎれば女は老年に分類された。髪に霜はたっぷりおいたろう。清照には子がなかったらしい。それなら夫は妾をおいたろう。清照は欲しなかったであろうが、当時の士大夫社会の通念で、彼女がいかにさかだちしてもふせぐ術はなかったろう。明誠夫妻が仲が好かったことは有名で、彼女もそれをひけらかしてはいるが、誇り高さがさせるので、あまりに賢い女は、青年をひきつけても、中年すぎると男はしばしば、己をしのぐ妻がけぶたく、若い無智な女にひかれるようになるものだ。明誠がそうだったとは断定できぬが、形跡はあり、これもその一つ。このとき彼女が夫と離れていた、といっても、死別でも生別でもなく、夫は妻を家に放ったらかし、妾といっしょに元宵の街に出てしまった、とも考えられぬわけではない。孔子をダシにして今の政治ボスをやっつける。ついさきごろにもあった。これが中国での古典用法のしきたりで、文字の達人の彼女がそれを知らぬはずはない。「夜歩きは気がひける」。女の夜のひとり歩きは、人目をそばだたせようが、他の夫妻に同行するならとがめらるべきことでもない。それにしても夫に伴われぬ老女がパーティーに出ているのは、もの笑いの種であろうし、ばったりそこで若い女を連れた夫に出くわしでもしようものなら。「帕見」には、そんなおそれとためらいが揺曳する。

不如向、　　Bùrú xiàng

簾兒底下，　liánr dǐxià,

聽人笑語。　tīng rén xiàoyǔ

それくらいなら、うちにいて、遠くから風にのってくるざわめきを伴奏に、昔の楽しかった元宵を、想い出しているほうがましだ。

仲のいい夫婦は一生間断なしに仲が好かったように錯覚しやすい。明誠・清照もそう思われている一組だ。美談であって、それをたたえることに水をさす気はないが、平静な表情の奥で葛藤と闘っているのも人間で、清照がそのようなすぐれた女闘士だった、と見ることは、彼女を尊重することと矛盾はすまい。（一九八五・6・13）

宝　山

ーランカーの岸辺で（八）ー

原田憲雄

その山は、種々の宝玉類からできていて、諸宝がいりまじり、キラキラ光り、百千の日が黄金の山を照り輝かすみたいだ。また無量の花園香樹があり、それがみな宝玉の香ぐわしい林で、微風がさやぐと、枝をゆすり葉を動かし、百千の妙香が一時にただよい、百千の妙音が、一時におこる。重畳する巖山は屈曲し、処々に仙霊の堂室があり、龕窟は無数で多くの宝玉でできていて、内も外も透きとおり、日月の光輝だってこれを再現することはできぬ。これらはみな、むかしの諸仙賢聖が、如実の法を思い、道を得た処である。

幕があがる。舞台は絢爛たる光耀の宝玉世界である。

魏訳は「彼山。種種宝性所成。諸宝間錯。光明赫炎。如百千日。照曜金山。復有無量花園香樹。皆宝香林。微風吹撃。揺枝動葉。百千妙香。一時流布。百千妙音。一時俱発。重巌屈曲。処処皆有仙堂霊室。龕窟無数。衆宝所成。内外明徹。日月光暉。不能復現。皆是古昔諸仙賢聖。思如実法。得道之処。」

これに当るところを宋訳は「種種宝華以為荘厳」とし、唐訳はまったく一字もとどめない。梵本はどうか。nānā ratna gotra puṣpa pratimaṇḍite, さまざまの宝玉類の花でかざられた、であって、宋訳と一致し、魏訳では「彼山。種種宝性所成。」に当る。「諸宝間錯」から「得道之処」にいたる美しい描写は魏訳以外にはない。そこで魏訳が梵本に無いものを増加した、と考えられやすい。それなら梵本も漢訳諸本も参照した唐訳に、現存梵本にある部分さえ無いのはどういうことになるのだろう。法蔵らの見た梵本のいずれにも nānā ratna gotra puṣpa pratimaṇḍite, が無かったのか、あるのに省いたのか。あるのに省いたのだ、とわたしには感ぜられる。「びるしゃな」の章で、法蔵は、宋訳題名の「宝」字は梵本にも魏訳にもない、という（本誌39号16頁）ことに触れた。そうして、宋訳題名に「宝」字のはいっているのは「グナバドラがこの経の心をつかんで与えたもので、とがめるにはあたらぬ」と弁護しておいた。法蔵が宋訳の「宝」字にこだわり、かれの関与した唐訳に、ランカーの「宝山」たることを示す文章が欠けていることは、遇然ではなく、唐訳者たちのこの経に対する基本的見解が、ここに示されている、と見るべきだろう。現に法蔵は、サンスクリットのlaṅka に「入り難い」「かけはなれている」「おそろしい」「うつくしい（荘厳）」の四義のあることを指摘し、前の三つについては詳く説明しながら「うつくしい」については「たくさんの宝で飾られているから美しい」というだけである。それにしても「たくさん

の宝で飾られているから」という知識をかれはどこから得たのだろう。かれのけなす宋・魏訳からか、梵本からか。ともかく知識をもち、諸本を批評しうる立場にいたかれが重く関与する唐訳に、無いのは、かれらが、ランカーと「宝」との結びつきを必然としていなかったことになる。かれらの見解は正しいか。

nānāは「さまざまの」だから「種種」でよい。ratnaは「宝」、gotraは「種姓・種性」、つまり宝石類。宋訳は訳文ではgotraは省略し、魏訳はきちょうめんに訳出した。puspaは「花」これは宋訳は訳出したが魏訳はない。しかしこれは省略したのかどうかは分らぬ。魏訳にだけある続く文にその花についてたっぷり説明があるのだから。pratimanditeは、prati－mandita の於格でマラヤ山頂のランカー城にかかる。prati は「に対し」「の方へ」の意の副詞、mandita は「飾る」の意の動詞 mand の過去受動分詞だから「飾られた」。だから宋訳の「以為荘厳」（美しくした、飾った）は正確だ。魏訳の「〈宝性〉所成」は、「〈山が宝玉で〉形成されている」で少しニュアンスが違う。梵本・宋訳は、山そのものは宝玉ではないが、そこへ宝玉を加えて飾った、というふうにとれる。ところで、mand は mani（宝珠）が動詞化したもののように見える。いわゆる摩尼宝珠である。『大智度論』によれば、マニは竜王の脳中から出たとも、インドラの武器についていたがアスラとの戦いで地に落ちたとも、過去久遠の仏の舎利とも伝え、マニを手にとれば毒にも害されず火にも焼けず、願いがすべてかなうので如意宝珠ともよぶ。また『雑宝蔵経』では摩竭大魚の脳中から出るといい、その他諸経にさまざまの伝承を述べる。要するに珠玉の根本とされるのだ。すると、pratimand には、その珠玉を物に加えて飾るという意の分岐する前に、物が珠玉そのものであるとか珠玉そのものとする、といった方向での意味があったのではないか。『楞伽経』

には、外から塗りつけて飾る意の ābhā なる語も使われ、魏訳では「垢」、唐訳では「著」、その否定を宋訳では「浄」とする。それなら、マラヤ山頂のランカー城の美しいのは、外から加えられた宝玉によってではなく、その本来の宝玉性が咲き出たので、それがpratimandita と表現されているのなら、「宝性所成」なるボディールチの訳語は宋訳の「以為荘厳」より深く内面を察した訳語といえる。

空海の師の師のまたその師にあたるヴァジラボーディー（金剛智）は七世紀から八世紀にかけての人で、中インドあるいは南インド出身。中国に来る前に師子国にゆきランカー城に入りランカー山に登り仏跡を礼したといい、長安の西明寺の円照が八〇〇年に著した『貞元新定釈教目録』巻十四に次のように記す。

僧俗の弟手八人をともない師子国にゆきランカー城（今のアヌラーダプラであろう）に着いた。王臣四衆が香花をもって出迎えた。無畏王寺（アバヤギリ・ヴィハーラ・無畏山寺）にゆき仏牙（仏の歯骨）に頂礼し、そこで半年供養し、かくて東南のランカー山に参ることにした。途中、仏眼塔を礼拝した。そこまでが一日一夜、ついで七宝山城に泊り、次にローハナ国に着いた。同国は宝山を管理している。国王は小乗の信者だが和上（金剛智）の来るのを知り、城を出て迎えた。和上は一カ月余、大乗の教えを説き、国王は信受し、宝玉を布施しようとする。和上は「ここへ来たのは仏跡を頂礼したいためで、珍宝のためではない」といって辞したので、王は和上を山下に送らせた。その山には猛獣・師子・毒竜・野人・羅刹が多く、黒風苦霧が常にこの山上の珍宝を守っており、聖跡参拝の人でなければ、昇ってこの山に入ることができない。和上が山下で香をたき、昔、仏がこの山で説法された時の山神にお目にかかりたいと発願すると、たちまち霧は晴れ猛獣はかくれた。そこで弟子と、

山の北面から東に進み河を渡り、さらに上り西北に転じまた西南の谷間を、つたかずらをよじ、出はずれると山の中腹である。その北側で泊ったが泉水がわき出て、その中には紅頗梨（ルビー？）や金銀諸宝がぎっしり、また宝玉の草木、マンダラ華・ウパラ華が多く、時々龕窟に出ありが、みなこれはむかしの仙霊が修道した処である。山中の香花草木は数えきれぬ。途中で停滞せず、七日かかって山頂に達し霊跡をたずねて一つの円い石を見つけた。これぞ正しく仏足石である。ここで一日禅定に入り、定から出て七日、あちこちを見歩いた。山上は風が強く、長時間とどまってはいられぬ。頂上から四望すると、山下五、六十里の外周を山がめぐり、さながら城壁である。山上はすべて白雲。国人はランカー城山と名づけ、山外の西北は師子国境に連なり、そのほかは大海である。

節略したが肝心の所はぬけていまい。かれの登った「ランカー城山」がマラヤ山脈主峰のスマナ峰であることは間違いなく、この行記は、今のスリランカの地図に照しても正確だから、ほぼ信頼しうる。かれがスマナ峰を楞伽経の説処と信じたことは、疑いなく、山下で「会いたい」と念じた「山神」はラーヴァナをさすことも察せられ、かれの読んだのが十巻本魏訳であったことは、記事の一部に「請仏品」冒頭の美景を述べるところと一致することで知りうる。（円照の目録は勅命をうけ編まれ、金剛智の記事もその弟子筋の確かな記録に拠ったろう）

この山の宝山であることは行記でも知られたが、ランカー全体が宝玉の島であることは『島史』『大史』にもしばしば記す。

よき風土に恵まれ、食物も豊かにして、宝鉱を蔵し、過去仏の訪れたまい、群聖の往来せられたる良野、最

勝のランカー島……（島史1）

そこにはマニより成り、真珠や水晶もておおわれたる地あり。種々の花にて飾られたる園や池ありき。（同16）

かの神々に愛されたティッサは父の死後、王となった。彼の灌頂の時にも多くの瑞祥が現れた。全ランカーに深く埋蔵された宝が地上に現れた。……七種の真珠が大海から現われて……。（大史11）

ティッサ王は前三世紀の人である。また五世紀のはじめに中国を出、西域・インドを経てランカーにゆき、海路帰国した法顕の旅行記『高僧法顕伝』にも次の記事がみえる。

〈南インドの摩梨から〉船で十四昼夜で師子国についた。かの国人のいうところでは、インドとの距離七百ヨージャナ、その国は洲上にあり、東西五十ヨージャナ、南北三十ヨージャナ、左右の小洲は百幾つかあり十里、二十里、あるものは二百里も離れているが、みな本洲に統属している。多く珍宝珠璣を産出し、マニ珠を出す地方が十ばかりもある。王は人に守護させ、採取者から十分の三を税としてとる。この国はもと人民がおらず、鬼神と竜がいた。諸国の商人が売り買いした。そのとき鬼神は姿を見せず、宝物に値段を付けておく。商人はその値に見合う物をおき宝玉をもちかえる。諸国の人が楽土であることを知り、次々やって来てやがて大国になった。

そして現在のスリランカも、種々の宝石を豊富に産出する国であることは有名だ。これらの文献からしても、事実からしても、マラヤ山のランカー城を「宝性所成」（宝玉類からできている）というのは「以為荘厳」（飾られている）というより、本質を的確に表現したものと言いうる。そうして、それに続く魏訳の伝えるこの山の

描写も、金剛智のそれや深井氏の『スリランカ』の記事につき合わせて、決して誇張とはいえない。さきにも触れたように金剛智のは「請仏品」の文章をなぞったのではあろうが、その現場をわが目で確かめたればこそのなぞりかたであろう。

ただ、そこに「その山には猛獣・師子・毒竜・野人・羅刹が多く、黒風苦霧が山上の珍宝を守る」というのは注目してよい。七～八世紀にもランカーが羅刹の住処と信ぜられたのだ。かれが実際に会ったのは「野人」だけだったが。法顕の伝える「鬼神と竜」はおそらくこの島の原住民だが、かれらがすでに宝石珠玉を採取し、交易していたことが伺え、かれらがすこぶる平和的であったことも察せられ、これを金剛智の記事に代入すると、七～八世紀にも非アーリアンの原住民が、羅刹・夜叉・竜等と呼ばれて、マラヤ山脈や海浜離島で、宝石・珠玉の採集・研磨などに従事し、シーハラ達は、その利権を外部に対してかくし、あるいは苛酷な収奪をおおうため、その地域を悪風苦霧・百鬼夜行のちまたといいふらした、との解釈もなりたつ。

さて、経典、特に大乗後期のものは、そこに描く事物が、現実の、あるいは歴史的の事物に近似していても、かならず象徴的に描いているので、珠玉にしろ宝山にしろ、わたしがくどくど挙げて来た珠玉宝山にとどまらぬ。十七世紀にわが国の養存が『楞伽経論疏折衷』で「楞伽山は、仏の自覚内証聖智の、八識中より出で、高大に顕現するを表わす」というのは、一言で核心をついているが、わたしは、経典でも、平凡無智なわたしの目がまず触れる言葉をありのままに読み、そこから受ける印象を大切にしながら読みほどいてゆきたいので、魏訳が示すマラヤ山のランカー城を、そのまま、ああ美しいなと感嘆し、そこが釈尊出世以前にも、すぐれた人たちの修道

の場処だとあれば素直に受けとり、その時そこにいたのは「夜叉・羅刹・竜」だけだったのなら、「道」を修めたのもかれらであり、そこの古仏とは「夜叉・羅刹・竜」出身の仏だったのだな、と自然に考えられる道筋を歩いてゆこうと思うのである。この道筋は極めて自然だけれども、「夜叉・羅刹・竜」を人間と峻別し、バラモンこそ神の子、シーハラこそ仏の子と信じて疑わぬ人たちには到底受けいれられないだろうから、その人たちの間で伝持されるうちに、都合のよくないところが消えたろうことは、特に聖典は口承を尊重したインドやランカーでは、ありうべきことである。現存梵本に無いから魏訳にしか無いこの美景はボディールチの創作挿入というのは、経典の素直な受けとり方でなく、また科学的ともいえないだろう。

宝山は宝山である。ランカーが物質としての宝山であることは、すでに説き明かされた。精神としての宝山であるゆえんは、次号から読んでゆこう。

（一九八五年六月十八日）

「私の好きな詩」

六月十六日夜、食事をおえて、わたしの机に帰ると、「父の日」と記した灰色の美しい便箋八枚をとじたものがおいてある。見ると娘の道子がプレゼントとしてくれたので「私の好きな詩」と題し、現代詩二、訳詩九が清書され、最後に自作の「いちょうとぐみ」がそえてある。現代詩の一つは緒方昇「鬼三戒」

離レヨ／聴（ユル）セ／義ヲ言ウナ／／鬼を志す者は三つのいましめを守ることが肝要と思います。ひとつ。人界を離れて孤立すること。メダカの群れにははいりませぬ。独行して、団体交渉をいたしませぬ。／ふたつ。

打たれても、叩かれても、踏まれても、蹴られても、ゆるします。我慢ではありませぬ。すべてを聴許するのです。／三つ。義とは議論であり、注釈であり、理屈であり、弁解であり、主義でありますが、そういうことは、一切、鬼は申しませぬ。

二つは壺井繁治の「朝の歌」

生まれ変わったような／朝を　むかえたい／その日　かぎり／死んでも惜しく／ないような

訳詩は和田利男氏訳の、賀知章「袁さんの別荘で」李白「さしむかい」梁川星巌「しつけ」李白「汪倫に贈る」杜甫「興にまかせて」に、わたしの訳した陶弘景「山の中には」など四首。

いちょうとぐみ

原田道子

ある春の日　庭のかたすみで
いちょうは　すずなりに　実をつけたぐみに
話しかけた
「今日のあなたは　一段とお美しいですね」
ぐみは　いちょうのことなど　好いていなかったので
冷たく

「ありがとう　でもあなたには関係のないことですわ」
と　そっぽをむいてしまった
いちょうは　がっかりした
そして　秋になった
夏の間　眠っていた　ぐみは
あざやかな黄色になった　いちょうを見て
すっかり感心して　言った
「あなたは　とても　おきれいになったのね！」
「ええ　あなたが眠っている間
僕はずいぶんと努力して
あなたに負けず美しくなったのです」
いちょうの答えを聞いて
ぐみは　しょんぼりしてしまった

礼を言いに娘のところへ行き、「鬼三戒」の「離レヨ」はいくらかできそうだが「聴セ」と「義ヲ言ウナ」はお父さんには、本当にいいましめだよ、といったら「お父さんは鬼ではないから、いいじゃないの」　（憲）